
コナンのピンチ??に探偵団!

平葉陽蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンのピンチ???に探偵団！

【Nコード】

N2511B

【作者名】

平葉陽蘭

【あらすじ】

学校の帰り、この間キャンプに行った時に起こった殺人事件の話をしていたコナンたち……。元太の提案でコナンの家の近くに最近出来た公園に明日遊びに行くことに……。そこで遊んでいたら・

ブローグ

「キーンコーンカーンコーン」

授業の終わりを告げるチャイム……。

授業を終えた子ども達がランドセルを背負って次々と校門から出て来た。

そしてコナン達も……。

光彦 「それにしても僕たちってよく事件に巻き込まれますよね・
……この間だって……。」

コナン 「ああ。この間のキャンプのことか？」

歩美 「死んでるおじさんを見つけた時はびっくりしちゃったよ・
……。」

元太 「薪まきを拾ってる時に歩美があのおじさんを見つけたんだっ
たよな……。」

でもよー光彦、オレ達は少年探偵団なんだぜ・……・
……。」

哀 「探偵に事件はつきものと言いたいんでしょ？小嶋君は。」

元太 「灰原く。先に言うなよ。」

哀 「小嶋君がつまっていたから、代わりに言っただけだよ。」

コナン達はこの間の土・日に阿笠博士とキャンプに行って殺人事件
に遭遇していたのだ。

光彦 「まあまあお2人とも。それより、なぜ人間は人間を殺す
んでしょうね……。」

気持ちにはわかりませんが……。殺人がなくなればいいんですけどね。」

歩美 「そうだね、光彦君。」

哀 「それは無理ね。人間には感情があるもの。円谷君が『気持ちにはわからない。』」

って言うてたけど、それは気持ちはわかりたくないけど、

『人を殺すまで行くものなのか?』ってことでしょ?」

光彦 「その通りです。」

コナン 「確かに灰原の言う通りだな。人を殺すという感情はその本人にしかわかんねーからな。」

歩美 「ねえねえ。仲良くしてる人とかが殺人犯だと疑われて、その人が犯人であってほしく

ないから、その人が犯人でないという証拠を見つけようとしたら、その人が犯人だという

証拠がでてきた時って悲しいよね……。」

コナン 「そうだな……。 (オレだってレイの時は……。)」

(大阪3つのK事件の時のこと。)

光彦 「それよりコナン君。どうにかならないんですか?」

コナン 「何がだ?」

光彦 「1人だけわかったふりしたり、抜け駆けしたり……。

僕たちは少年探偵団なんですよ!」

元太 「そうだぞコナン。光彦の言う通りだ。なあ、歩美もそう思うだろ?」

歩美 「うん……。 (でもそういう時のコナン君ってかっこいいんだよね……。)」

歩美は一応「うん。」と返事はしたものの心の中では完璧な賛成ではなかったのだ……。

哀 「確かに江戸川君はそういうところがあるわね……。」
コナン 「灰原までそんなこと言っなよ……。 (しゃーねーだろ探偵の血がさわいじまうんだから。)」

そりゃそうだ。コナンの招待は工藤新一。哀を除いた元太・光彦・歩美の3人は真正正銘のホンモノ小学1年生。その3人より事件に対しての執着心が強いのは当たり前。

元太 「もうこんな話はやめて、このあと公園にでも遊びに行か
ねーか？」

光彦 「いいですねえ。そうしましょう。」

歩美 「私は無理……。今日、お母さんが用事ででかけるから
留守番しなくちゃいけないの。」

元太 「じゃ、明日の土曜日にするか？」

歩美 「それなら大丈夫。オッケー」

光彦 「コナン君も来ますよね？」

コナン 「ああ……。」「

哀 「私はパス。」

元太 「なんでだよー？」

哀 「博士と掃除する約束してるの。博士の部屋ってすぐにち
らかっちゃうから……。」

掃除するの大変なのよ……。」

光彦 「じゃあ、みんなで博士の家に掃除を手伝いに行くっての
はどうですか？」

哀 「断るわ。あなたたちが来ると余計にちらかりそうだから・
……。」

光彦 「ひどいですよ……。灰原さん。」

元太 「いいじゃんか、光彦。オレ達はオレ達で遊ぼうぜ。それ
よりどこの公園にするんだ？」

光彦 「そうですね。たまには違う公園に行きたいですね。うーん。あつ、そういえば、

コナン君の家から10分くらい歩いて行っただころに最近大きい公園が

できたって聞きましたよ。僕も詳しくは知らないけどですけど・・・。」

コナン 「それなら知ってるぞ。長い間空き地になってた所だ。場所も知ってる。」

光彦 「じゃあ、コナン君の家に集合しましょうか？それで何時に集合しますか？」

元太 「朝はきついからやっぱ昼からだよね・・・。」

歩美 「じゃあ2時くらいでいいんじゃない？」

光彦 「そうですね。じゃあ2時ってことで。」

コナン 「じゃあ2時にオレン家^ちに集合な。」

元太・光彦・歩美 「OK！」

でもこの時、元太・光彦・歩美の3人は知らなかった・・・。
明日起こることを・・・。

プロローグ（後書き）

初めまして。平葉陽蘭です。

初めての小説なので、おかしなところもありますが、そのあたりは初めてってことで・・・。

このサイトの小説は少し前から読んでいて自分も書きたいなぁ~と思っていたんですがなかなかアイデアが浮かばなかったので・・・。

平葉は高校生で今定期テスト真っ只中。

お母さんがちょっとでかけているので

その間に書いております・・・。

第1章 Mystery conversation（前書き）

Mystery 〓 謎

conversation 〓 会話

つまり謎の会話ということです。

第1章 Mystery conversation

コナン 「ただいま。」

学校から帰ってきたコナンはこの時間、探偵事務所にいるであろう小五郎に言った。

小五郎 「おお、コナンか。」

そう言う小五郎の視線はコナンとは別の方向を向いていた。
コナンもその方向を見てみた……。1つの確信をもって……。

コナン 「あ……やっぱり。」

小五郎 「おつ、コナンも知ってたのか？一緒に見るか？」
と半分冗談で言った。

コナン 「あ……いや、今日の新聞のテレビ欄に載ってたのをたまたま見つけて……。

僕はいいからおじさん1人で見なよ。」

小五郎のしているTVとは……。沖野ヨーコの出演でドラマの再放送……。

沖野ヨーコの大・大・大ファンである小五郎がコナンそっちのけで見ているのも無理はない。

そしてコナンは上へと上がっていった……。

P M 6 : 0 0 ごろ・・・。

「ただいま。」

と空手部の練習を終えて帰って来た蘭が言った。

コナン 「おかえり、蘭ねえちゃん。」

蘭 「今からごはん作るから待っててね。」

と2人に言っと、自分の部屋にかばんを置いてごはんを作り始めた。

コナン 「今日はな〜に？」

蘭 「今日は親子丼よ。」

40分後・・・

「いただきます。」

と言って3人は食べ始めた。

コナン 「おいしいよ、蘭ねえちゃん。」

小五郎 「蘭、ビール持つて来い。」

蘭 「もー、しょうがないわね・・・。」

小五郎は蘭に持ってきてもらったビールをグビグビと飲み始めた。

蘭 「明日の部活は朝の9時からだから、先に行ってるよ。」

朝ごはんは用意しておくから、起きたら食べてね。おひるには帰ってくるから。」

コナン 「うん。」

小五郎 「おお。」

コナン 「僕、明日の昼から遊びに行くから。」

蘭 「どこに行くの？」

コナン 「最近、ここから近い所に大きな公園が出来たでしょ？そこに行くんだ。」

蘭 「知ってる知ってる。平下薬局の前の所でしょ？」

コナン 「そうそう。」

蘭 「公園が出来る前って何があったわけ？空き地のころしか知らないな・・・私。」

コナン 「おじさん知ってる？」

小五郎 「う・・・ん。確かにかの工場だったな・・・。10年位前に倒産して、

しばらくしてから取り壊されて、その後最近まで何も建てられることは

なかった・・・。一応草の手入れとかはされてて、遊べるようにはなってたが。」

コナン・蘭 「へえ。」

蘭 「やっぱりメンバーは探偵団いつものみんななの？」

コナン 「うん。だけど灰原は行かないって。」

蘭 「哀ちゃんには行かないんだ。」

コナン 「博士の家の掃除手伝うんだって・・・。」

蘭 「そっか。」

コナンと蘭がこんな会話をしていると・・・。

小五郎 「ビール持って来い。」

と酔っ払った声で言った。

蘭 「今日の分はおしまい。」

小五郎 「蘭ちゃんったら厳し〜い。」

蘭 「もー、お父さんったら。」

コナン 「おじさん、お酒ほどほどにしときなよ……。」

小五郎 「おまえらにやわかんね〜んだよ……。大人になったらわかるからよ〜。」

蘭 「そんなのわかりたくもないわ……。ねえ〜コナン君？」

コナン 「うん。」

蘭 「公園には何時に行くの？」

コナン 「2時に出発するんだ。」

蘭 「2時に出発？2時に公園じゃなくって？」

コナン 「他のみんなは場所をよく知らないんだ。僕だけがちゃんと場所を知ってるから、」

2時到这里集合ってことになったんだ。」

蘭 「そつかあ〜。ここから近いもんね。他のみんなはもうちょつと離れてるから」

ちゃんと場所知らないんだ。」

コナン 「うん。」

小五郎 「気をつけて行くんぞ。あの公園の前は信号はあるが車が結構通るからな。」

コナン 「うん。（わかってるよ……。まあこんな身体からだで言うても説得力ねーか……。）」

そして食べ終わり、後片付けをしてコナン達はTVを見ていた……。

PM9:00……。

蘭 「コナン君、そろそろ寝なさい。」

コナン 「はい。」

小五郎 「ガキは早く寝ろ！」

と酔っ払った声で言う。そう、あの後、蘭にビールを出してもらっていたのだった。

もちろん、蘭は渋々……。

そしてコナンは寝室へと入って行った……。

でもすぐに寝ようとはせず、何かを考えていた……。

まあ元々すぐに寝る体質ではなかったが……。

コナン 「抜け駆けにわかったふりか……。そういつつもりでや
ってんじゃねーんだけどな……。

身体からだが動いちまうんだよな……。あいつらの気持ちも
わからなくもないが……。

そうだなあ、たまには……。」

とここで時間を遡さかのぼること6時間前……とある場所でこんな会話が
されていた……。

？ 「……………ってことが
あったの。」

？ 「そうか。それで？」
？ 「……………っていつの
はどう？」

？ 「ちよつとあれだがいいだろう。」
？ 「じゃあ決まり。」

「そうと決まったら準備だ。」

このような会話がされていたのだった……。

そしてコナンは……。

コナン 「よし、博士に電話しよう。」
と電話をかけるが……。

「RRRRRRRRRR……。」
一向に出る気配がない……。

コナン 「あれ？博士いないのか？でももう夜の9時まわってるし……。
また何かやってんのか？」

まあいいや、明日の朝にでもかけよう……。」

そしてコナンは何やら作業をやり始めた。

1時間後……

コナン 「よし、出来た！後は明日の朝、博士に連絡するだけ……。
よし寝よう。」

この時コナンは知らなかった。
ある計画が着々と進行していることを……。

第1章 Mystery conversation（後書き）

第1章お待たせしました。

ブログから何日かたってしまい、すみません。

テスト中なもので、時間を見つけては、ノートに書き、それをここに打ち込んでいたもので・・・。

まだ事件は起こっていません・・・。

今回謎の2人の会話がありました・・・。

勘のいい方はこの2人が誰かわかったと思いますが・・・。事件は次の章かその次くらいに起こる予定です。それでは・・・。次の章の投稿は何日かあくと思いますのであしからず・・・。

第2章 Mystery visitor (前書き)

Mystery 謎

visitor 訪問者

つまり謎の訪問者です。

でも勘のいい方は謎ではないかもしれません・・・。

第2章 Mystery visitor

朝7時・・・・・・・・・・

「ジリリリリリリ」

目覚まし時計の音が鳴った。

蘭 「もう7時かあ。起きないと・・・。」
と言って起きた。

帝丹高校の制服に着替え、洗面所で顔を洗って朝ごはんを作り始めた。

今日の献立は玉子焼きとトーストだ。そう、毛利家の朝ごはんはトーストと一品なのだ。

その一品は日によって異なる。ただ6月～9月の終わりくらいまで、

コナンと蘭はコーンフ레이크を食べている。

では小五郎はというと・・・。1年を通してほぼトーストである。

なぜコーンフ레이크を食べないのかというと・・・。

その理由は簡単だ。口に合わないのである。

土・日は菓子パンなどの場合もあるので、その時は小五郎もそれを食べる。

コナン・小五郎、そして自分の分の玉子焼きを作り、食パンを焼き、
(自分の分だけ)

ココアを作って朝ごはんができた・・・。

蘭はTVをつけて食べ始めた。

ちょうど天気予報をやっていた。

気象予報士 「今日の東京は1日ずっと晴れでしょう。……………」
……………」
などと言っている。

蘭 「よかったわあ、今日晴れで。コナン君公園で思いきり
遊べるわね。」

そして天気予報が終わり、スポーツニュース、普通のニュース……。

アナウンサー 「昨日の夜11時ごろ利善町3丁目の民家で火事がありました。」

火は40分後に消し止められましたが、この中
から住人の野上陽介さん46歳が

遺体となって発見されました。火事の前に不審
な男が出入りしていたという

目撃情報があったため、警察が事件として捜査
しています。

蘭 「事件か……。ほんとなんで起こるんだろうな……。
あつ、そろそろ行く準備しなくちゃ。」

と言って自分の食べた分の食器を洗い、歯をみがき、すべての準備
を終え、

置き手紙を書くとした時……

「ガチャッ」

ドアを開ける音がした。

コナン 「蘭ねえちゃん、おはよう。」

蘭 「コナン君おはよう。TVの音うるさかったかな？」

コナン 「違うよ、トイレに行きたくなっただけ。」

蘭 「コナン君、今日は玉子焼きだから、お父さんと食べる時、電子レンジで温めて食べてね。」

コナン 「うん、わかった。」

蘭 「じゃあ、私行くね。」

コナン 「いつてらっしゃい。」

朝8時、蘭は学校へ行った。

コナン 「もう起きとこう。」

そう言っパジャマから着替えた。

そしてTVをつけた。さっきの火事のニュースを別の番組でやって
いた。

コナン 「こりゃ放火殺人だな……。毎日毎日事件ばっかで嫌に
なるぜ……。」

しばらくして小五郎が起きてきた。

コナン 「おじさん、おはよう。」

小五郎 「おはよう、コナン。」

コナン 「今日は玉子焼きだよ。『電子レンジで温めて食べて。』
って蘭ねえちゃんが言ってたよ。」

小五郎 「おまえそんなに早く起きたのか？」

コナン 「違うよ。トイレで起きた時に言われたんだ。」

小五郎 「そうか。」

コナンは自分の分と小五郎の分のパンをトースターで焼き、
小五郎のコーヒーと自分のココアを作り、2人は朝ごはんを食べ始
めた。

朝の芸能情報番組に小五郎がチャンネルを合わせると、ちょうど沖野ヨーコが

新曲のPRに来ていた。大ファンの小五郎はテレビに釘付け。

そして朝ごはんを食べ終わり、コナンは食器を運んだ。

小五郎 「コナン、オレは事務所にいるから何かあったら来いよ。」

コナン 「うん、わかった。」

そして小五郎は事務所へと下りていった。

「さーて、博士に電話するか。」

$$\begin{matrix} \lceil \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ R \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \lfloor \end{matrix}$$

コール音は鳴り響くだけ……

コナン 「出ねえなー。まだ寝てんのか？後でもう1回かけて出なかつたらオレ1人でやろう。

「じゃあ、アレ」の手直しでもするか……。

と、言、つ、て、何、か、を、始、め、た、。、。、。

1時間半後・
・
・

コナン「よしっ、出来た。これでいいだろう。」

その“何か”は完成したようだ。

そのあとは適当にテレビを見ていた。

1時間後の11時半すぎ・・・

「ただいま。」

蘭が帰って来た。

蘭 「お昼はホットドックよ。」

とコナンと小五郎の2人に言い、作り始めた。

コナンはもう1度博士に電話してみることにした。だが・・・

「RRRRRRRRRR・・・」

さっきかけた時と同じでコール音だけが鳴り響く。

コナン 「いくらなんでも起きてるよな・・・？またなんか作ってるのか？

もうこうなったらオレ1人でやろう。」

30分後・・・

蘭 「できたわよ。」

この声で小五郎も上^{こっち}へあがってきた。

「いただきます。」

と言って食べ始めた。

因^{ちな}みに、毛利家のホットドックとは・・・。

千切りキャベツを炒め、塩で味付け。後は長いソーセージを焼き、塩・こしょうで味付けしたものを

パンにはさんだ結構シンプルなもの・・・。小五郎と蘭はパンにマスタードをぬっている。

コナンはというと・・・。マスタードはぬらない。蘭がコナンの正体を知らないからだ。

ホットドックを食べ終えると、小五郎は再び事務所へと下りていった……。

食器を洗い終わった蘭が言った。

「歩美ちゃんたち、2時くらいにくるんだったよね？」

コナン 「うん、そうだよ。」

蘭 「みんなそろって来るのかな？」

コナン 「昨日はそんなこと言ってなかったけど、ひよっとしたら3人でそういう話をしてて

3人で来るかもしれない。それより、どうしてこんなこと聞くの？」

蘭 「いや……別に……なんとなく。私、学校の宿題するから、何かあったら呼んでね。」

そう言う蘭は自分の部屋へと入っていった。

コナン 「じゃあ、“アレ”の最終チェックでもするか。」
と言い、作業を始めた。

30分後……
宿題を終えた蘭が出て来た。

コナン 「蘭ねえちゃん早かったね。」

蘭 「現代文の意味調べだったから……。まだ数学のプリントがあるんだけど、

とりあえず現代文だけやったんだ。そうそう、さっきのことだけど……

みんなバラバラで来るんだったら歩美ちゃんが1番に来ると思うよ。」

コナン 「どうして？光彦が1番って言うんならわかるけど。」

蘭 「わかってないなあ、コナン君。」

コナン 「えっ？なんで何でそういうことが言えるわけ？」

蘭 「ふふふ……。内緒。」

コナン 「蘭ねえちゃん、教えてよ……。」

結局、蘭は教えてくれなかった。

蘭 「私、数学の宿題やるから何かあつたら呼んでね。」
と言いつ自分の部屋へ入っていった。

コナン 「なんだよ……。蘭つたら……。仕方ねえ、行く準備で
もしておくか。」
と言つてサッカーボールを用意し、例の物をズボンのポケットに入
れて、テレビを見ていた。

30分後の1時半すぎ……

「コツコツコツ……」

1つの靴音……

探偵事務所への依頼人か？

小五郎はそんな音には気づかなかった……。その理由^{わけ}はいたつて
簡単だ……

小五郎は沖野ヨーコの出演しているドラマのビデオを見ていたのだ。
……。靴音^{そんないし}なんか気づかない。

そして……

「コンコン……」

事務所ではなく、上のドアの扉がノックされた・・・。

第2章 Mystery visitor（後書き）

10日に第1章を投稿してから1週間がたってしまいました。

高校の定期テストは水曜日に終わったのですが、なかなか話が進まなかったかと思うと、話が長くなったりして……。こんなになつてしまいました。

話が長くなったせいで、事件がこの章で起こる予定が、次の章で起こることになりました。

次では絶対事件が起こります。

たぶん、章の最後に事件が起こって……。……
って感じだと思います。

暗号の登場は次の次の章になります。

今のところ、全部でプロローグ、エピソードを合わせて、6話の予定です。

そしてこのタイトルにもなっているMystery visitorですが、この話を読んで勘のいい方はもう訪問者が誰かわかったと思います。

さらに勘のいい方はこの事件の犯人もわかったと思います。ヒントは与えているつもりです……。

題名を見てもわかるように、ただの事件ではありませんよ。

まあ犯人とかわかっててもだまって読んでいてください……。

毛利家の朝ごはんですが、これは私の家の朝ごはんを元に勝手につくらせていただきました。

それでは次の章でまたお会いしましょう……。……
できるだけ早く次の章を書くつもりです……。……

第3章 i d e n t i t y (前書き)

i d e n t i t y 正体

前の章でドアをノックしていた訪問者の正体ということですが。

第3章 i d e n t i t y

「コンコン・・・」

ドアがノックされた。

コナンはこの音に気づいたようだ。

コナン 「誰か来たみたいだな・・・誰だろう？」
と思いながらドアに近づいていった。

「ガチャッ」

ドアをあけると・・・コナンの目の前に立っていたのは・・・

コナン 「歩美ちゃん!？」

歩美 「早く来ちゃった。中に入って待っててもいい?」

コナン 「うん、いいけど・・・。(蘭の言う通りだったな・・・。
)」

歩美 「おじゃまします。」

この声が聞こえたのか、蘭が自分の部屋から出て来て言った。

「歩美ちゃん、早かったわね。」

歩美 「私が早く来ることわかってたの?」

蘭 「コナン君から、みんながここに1度集まるってことを聞いてて、たぶんそうだろうな。」

って思ったのよ。」

歩美 「すごい。なんでわかったの?」

蘭 「私の方が歩美ちゃんより“女”を長くやってるからね。」

と言って歩美に近づき、小声でこう言った。

「コナン君と一緒にいたいんだよね?」

それを聞いた歩美は・・・

「うん・・・。」

そして蘭が、

「わかってるって。ジュース出してあげるから、2人が来るまでコナン君とゆっくりしててね。」

歩美は・・・

「蘭おねえさんありがとう。」

そこにコナンが・・・。

コナン 「2人で何をこそこそ話してるの？」

歩美・蘭 「何でもないよ。」

蘭 「ジュース持って来てあげようか？」

歩美 「うん、ありがとう。」

蘭は歩美に言ったとおりジュースと2人分のコップを持って来た。

蘭 「いる分だけ入れて、冷蔵庫に入れておいてね。」

と言ってまた自分の部屋へ戻って行った。

コナンは2つのコップにジュースを注ぎ、1つを歩美に渡した。

「はい、歩美ちゃん。」

コナンは歩美にコップを渡したあと、さらにコップを2つ持って来た。

歩美 「それって光彦君と元太君の分？」

コナン 「うん、そうだよ。光彦はともかく、元太はこういうのにうるさいだろ？」

歩美 「そうだね。」

コナン 「それより歩美ちゃん、どうして早く来たの？」

歩美 「家にいても暇だったから・・・。（コナン君と一緒にいたいなんて言えないもん・・・。）」

コナン 「そうか。」

歩美は話を変えた。

歩美 「コナン君、サッカーボール持って行くんだあ。」

コナン 「うん、そうだけど。そういう歩美は何か持って来たのか？」

歩美 「うん。普通のボールを持って来たよ。」

コナン 「元太ならお菓子を持ってきそうだな。」

歩美 「そうだね。」

コナン 「光彦なら何を持って来るだろう？」

歩美 「うん……。飲み物じゃない？」

コナン 「それはありえるなあ。」

などと2人が話していると……

「コツコツコツコツコツ……」

と2つの靴音がした。

そして……

「コナンくん。」

と声がした。

これを聞いて2人は、ドアを開けに行った。

コナン 「2人とも来たな。これで全員集合だな。とりあえず中に入れよ。ジュースあるからさ。」

光彦 「早かったんですね、歩美ちゃん。」

歩美 「うん。」

元太 「光彦、早く入ってジュース飲もうぜ。」

光彦 「ほんと元太君はこういうことに目がありませんね。」

元太 「悪いかな？」

コナン 「まあいいから入れよ。」

と光彦と元太は部屋へ入った。

コナンは2人のコップにジュースを注ぎ、光彦と元太に渡した。

元太 「ありがとよ、コナン。」

光彦 「ありがとうございます、コナン君。」

歩美 「ねえねえ元太君、ひょっとしてお菓子持ってたんじゃないかな？」

元太 「持って来たけど……。どうしてわかったんだ？」

光彦 「元太君の考えることくらいわかりますよ。ねえ、歩美ちゃん。」

歩美 「これ言ってたのはコナン君だよ。」

コナン 「じゃあ、歩美ちゃんがさっき言ってたこと、光彦に聞いてみたら？」

歩美 「光彦君、飲み物持って来た？」

光彦 「すごいですねえ。歩美ちゃん。大正解ですよ。」

歩美 「やった。」

コナン 「光彦なら、何か役に立ちそうなもの持ってくると思ってたぜ。」

ここで3人は元太があまりしゃべっていないことに気がついた。元太の方を見ると……ジュースを飲んでいた。

光彦 「元太君、2杯目ですか？コナン君に聞いてからならまだいいですけど……。」

元太君の頭には“遠慮”の2文字がないみたいです……。

コナン 「確かなさそうだな・・・。」

歩美 「ちよつとは遠慮したら？元太君。」

元太 「みんなしてなんだよ・・・。」

コナン 「じゃあこのジュース冷蔵庫に入れてくるから、先に外に出てて。」

元太・光彦・歩美 「うん。」

そして3人は先に外に出た。

コナンはジュースを冷蔵庫に入れ、蘭に「いつてくるね。」と言い、サッカーボールを持って外へ・・・。

そして4人は出発した。

とここで遡^{さかのぼ}ること数時間前・・・

「出来たぞ・・・。」

？ 「こっちはとづくにできてるわよ。」

「どれどれ・・・、見せてくれ。」

？ 「はい、これよ。」

「ふむふむ・・・。いいんじゃないのか？」

？ 「じゃあ例の時間より早めに出発するわよ。」

「わかった・・・。」

こんな会話が”ある所”でされていた。

第3章 i d e n t i t y (後書き)

早く書くとかいっていたのに遅くなってすみませんでした。なかなか話が進まなかった時があったもので……。冬休みの宿題をやっていたり家の大掃除の手伝いなどで、ノートに書けなかったかと思うと（私はいつもノートに書いてからパソコンに打ち込むので）話が進んでなかなか終わらなかったり……。

話が長くなりすぎて、2つに分けました。なので、事件は次の章です。次に事件が起こるとかいつてのびて本当にすみません。でも事件のところまで打ち込んでから分けたので2章とも投稿してあるので、続きをどうぞお読みください。

第4章 Kidnap occurrence(前書き)

Kidnap誘拐

occurrence発生

つまり誘拐発生です。

第4章 Kidnap occurrence

元太 「それにしても歩美、早かったなあ。」

歩美 「なんか暇だったから……。」

光彦 「こう思っていた……」

「まさか歩美ちゃん……コナン君に会いたかったからなんじゃ……。」

コナン 「次の角を左に曲がるぞ。」

3人はコナンに従い左へ曲がっていった……

光彦 「コナン君、あとどれくらいなんですか？」

コナン 「この先にあるコンビニにで右に曲がって少し行ったところだ。」

元太 「なあコナン、さっき左に曲がらずにまっすぐ行ってあとから左に曲がった方が

よかったんじゃないのか？」

コナン 「こっちの方が近いんだ。公園、どっちかっていうとこっち寄りだから……。」

元太 「そうなのか。」

光彦 「何して遊びますか？」

歩美 「かくれんぼしたい。」

光彦 「いいですねえ。大きい公園だからやりがいがありそうですねえ。」

歩美 「私、ボール持って来てるからこれでも遊ぼうよ。」

元太 「おっ、ボールあるのか。」

光彦 「ボールあれば色々遊べますね。」

コナン 「右に曲がるぞ。」

4人は右へと曲がっていった・・・。

PM2:15ごろ・・・

歩美 「あつ、見えた！」

光彦 「大きいですねえ。噴水が見えますよ。でも遊具らしきものが見当たりませんね・・・。」

コナン 「坂をのぼるんだよ。下でもちよつと遊べる場所があつて、^{スペース}上に遊具があるんだ。」

元太 「コナンよく知ってるな。もう遊びに行つたのか？」

コナン 「遊びに行つてねーよ。前を通つただけだよ。（高校生にもなつて行かねえっの。）」

光彦 「早く行きましょう。」

4人は公園に入り坂をのぼっていった。

20分ほど前・・・公園横の駐車場に車が1台・・・

？ 「例の時間より早く着いたわね。」

？ 「早く着いてよかったよかった。」

？ 「“例の物”は持つて来た？」

？ 「持つて来た持つて来た。」

？ 「私も”例の物”持つて来たわよ。じゃあ作戦の確認よ。
・・・だからね。」

？ 「わかつた？」

？ 「わかつた。」

？ 「これつけるわよ。」

？ 「と言つて何かをつけた。」

歩美 「広い。」

光彦 「広いですねえ。」

元太 「さあ遊ぼうぜ。」

光彦 「まず探検をかねてかくれんぼやりましょう。」

歩美 「やろうやろう。」

元太 「じゃんけんで鬼決めるぞ。」

「じゃんけんぽん。」

鬼は・・・コナンだ。

元太 「コナンが鬼だ。」

光彦 「範囲とかどうしましょう。鬼がコナン君ですから公園全部でいいんじゃないですか？」

元太 「そうだな。時間は広いから15分くらいでいいんじゃないか？」

歩美 「そうだね。」

光彦 「トイレに隠れるっていうのは、なしで。」

元太 「じゃあ始めようぜ。」

光彦 「広いですから50数えたら探しに来てください、コナン君。」

コナン 「おう。」

コナン 「いゝち、にゝい、さゝん・・・・・・・・・・。」

3人は隠れ始めた。

コナン 「・・・・・・・・・・。よんじゅうきゅう、じじゅう。」

コナンは50数えて3人を数え始めた。

コナン 「どこに隠れたんだ？ここは広いからやみくもに探すよりピンポイントに探した方が

いいな・・・・。まず元太と光彦だな・・・・。それにしても高校生になつてかくれんぼか・・・・。」

2分後・・・・太い木の所で・・・・

コナン 「光彦見つけた。」

光彦 「コナン君・・・早いですね。僕が最初？自信あつたのに・・・。」

コナン 「光彦なら裏をかくと思ったからさ。普通なら遠くに隠れようとするだろ？」

ただでさえここって広いから。」

光彦 「コナン君にはかないませんよ・・・。」

コナン 「次は元太だ。近くにいます。」

光彦 「元太君はそんなに早く走れないからですか？」

コナン 「そうだ。光彦、ついてくるか？」

光彦 「はい。」

その3分後・・・大きなゴミ箱の所で・・・

コナン 「元太見つけた。」

元太 「早いなコナン。」

コナン 「服が少し見えてたぞ。」

光彦 「あとは歩美ちゃんですね・・・。」

コナン 「歩美ちゃんはたぶん坂下りてただろうなあ。」

光彦 「そうでしょうね・・・。」

コナン 「2人ともついてくるか？」

元太 「おう。」

光彦 「はい。」

コナン 「ついてくるだけだぞ。そうじゃないと鬼が3人になって不公平だからな。」

元太 「“アンフェア”ってなんだ？」

光彦 「不公平ってことですよ。」

コナン達は歩美を探しに坂を下りていった。

コナン 「いねーな、歩美ちゃん。」

光彦 「そうですね。」

コナン 「もうちょっとここで探してみるか。」

元太 「そうだな。」

しばらく探すが見つからない・・・

光彦 「いないですね・・・。」

コナン 「あと5分だ。ひよつとして上か？上に行くぞ。」

光彦 「行きましよう。」

3人は上へ歩美を探しに行った・・・。

P M 2 : 4 0 残り3分・・・

コナン 「あと3分だ・・・。」

光彦 「見つからなかったらコナン君の負けですね。」

コナン 「負けねーって。あっ・・・、あれじゃないか？」

コナンは遊具の影に歩美らしき人を見つけた。

コナン 「歩美ちゃん見つけた。」

歩美 「見つかったやつだ。」

光彦 「なんとか間に合いましたね。」

歩美 「コナン君たち、坂の下に探しに行ったでしょ。」

たぶんそうなると思って近くに隠れてたんだ。」

光彦 「コナン君もやられましたね。」

コナン 「うるせーな。」

元太 「コナンでもあるんだな、こーゆーこと。」

コナン 「元太まで・・・。それより、トイレ行ってくるからボールでも遊んでくれ。」

光彦・元太・歩美 「OK。」

とコナンはトイレに向かうため坂を下りていった。

公園横の駐車場・・・

？ 「じゃあ行ってくるわね。これがぶっていくわよ。ちゃんと近くで待っててね。」

合図はするから。」

「わかった。」

コナン 「さうで、行動開始。トイレのそばに“アレ”を置いて行くか。」

コナンがトイレの方へ行くと・・・
女の子が泣いていた・・・

コナン 「どうしたの？」

？ 「自転車のカギ落としちゃったの・・・一緒に探して・・・」

と泣きそうな声で言う・・・

コナン 「うん・・・。（まいったな・・・。）このあたりで間違いないの？」

？ 「このあたりでこけちゃったから・・・そうしたら手に持ってたカギ落としちゃって・・・。」

コナン 「一緒に探してあげるよ。（またあとでなんとかするか・・・。）」

コナンがカギを探し始めたのを確認すると、女の子は行動を起こした。
チェック

ハンカチに何かをのせて、コナンの口へ・・・

コナン 「うつ・・・。」

コナンはハンカチにのっていた“何か”で眠らされてしまった・・・。

そして女の子は紙を置いて靴の下に“ある物”を置いた。

そして近くにいた仲間とコナンを車に運び、どこかへ走り去っていった・・・

10分後・・・

歩美 「コナン君遅いね。」

光彦 「そうですね。」

元太 「行ってみるか？トイレまで。」

光彦 「コナン君が迷うわけじゃないですからね。」

3人は坂を下りていった。

光彦と元太がトイレに入り・・・

光彦 「コナンくん。」

返事はない・・・

そのとき・・・

「きゃー。」

と歩美の叫び声・・・

光彦 「どうしたんですか？」

元太 「どうした？歩美」

歩美 「こ・・・れ・・・み・・・て・・・」

ふるえたような声で言う・・・

歩美が指差した先には・・・

1枚の紙とコナンの靴が片方残されていたのだった・・・。

第4章 Kidnap occurrence（後書き）

お待たせいたしました。やっと事件が起きました。

次には暗号が登場いたします。今、頑張つて考えています。もう、犯人はわかったかと思いますが……。今のところあと2章で完結の予定です。

ところでコナン達が行った公園ですが、一応私の家から自転車で15分弱くらいのところにある公園をモデルにしてあります。

では次の章でお会いしましょう……。

暗号があるので投稿はすぐというわけにはいかないと思いますが……。

第5章 意味不明な日本語（前書き）

今回はタイトルが日本語です。

英語にするつもりでしたが、

英語にしにくかったもので・・・。

第5章 意味不明な日本語

コナンの監禁場所で・・・

？ 「ここでいいわよね。じゃあ、私がやっておくから・・・。
電話の方頼むわよ。」

「わかった・・・。」

女の子はコナンをロープで部屋にある机の脚に縛りつけ、コナンの口にはガムテープを貼り付けた。
そして別の部屋へ行った・・・

光彦 「ちよっ・・・と・・・歩美・・・ちゃん・・・、それってコナン君の靴じゃないですかっ!？」

元太 「これは・・・どう見ても・・・コナンの靴だよな・・・？」

歩美 「だよね・・・2人とも・・・。」

今にも泣きそうな顔・・・

そして向こうへ走っていつてしまった。

元太 「ってことは・・・まさか・・・これって・・・。」

光彦 「誘拐ですよ、“誘拐”。近くに紙もありますし・・・。
でも・・・。」

元太 「なんだ？光彦。」

光彦 「コナン君ですよ・・・。そう簡単には誘拐されないと思うんですけど・・・。」

元太 「だよな・・・。」

光彦 「ひょっとしてこの誘拐は、コナン君からの挑戦状ではないでしょうか？」

元太 「ちよっと待て、光彦。ここにコナンの靴が片方残ってる

ぞ。どうやって歩いていくんだ？」

光彦 「あっ……。でも博士と……。って可能性だって……。」

そのとき……

歩美 「ちよつと待って、この誘拐は“本物”よ!!」
と戻ってきた歩美が言った。相変わらず泣きそうな顔だが、こらえているみたいだ。

光彦・元太 「えっ!!」

歩美 「これを見て。」

と言うと一枚の紙を差し出した。

光彦 「歩美ちゃん、それはなんですか？」

歩美 「向こうに落ちてたの。」
と場所を指差す。

その紙には……

オレはここにいる

ふきすにおい

→ → ← ← → → ← ←

見つけれられるかな？

by コナン

歩美 「これはコナン君の字よ！こつちがコナン君からの挑戦状よ。」

元太 「ってことは……。」

光彦 「コナン君は本当に誘拐されたんですよ。」

歩美 「じゃあ、そっちの紙を見ようよ。」

元太 「そういえば、まだ見てなかったな……。」

光彦 「それでは見ますよ……。」

3人は固唾^{かたす}を呑んだ……。
そこには……

君たちの友達は預かった。

返してほしければ次の暗号がしめす場所へ来い。

かあのぼんわけふしせはにおごばゆつうでよいめろぬちばさやへら
えなてびもきがそざこすとたじよへむを

いのししA ひつじA ねずみC ひつじA とりB うさぎA

うさぎD うしA

ひつじC うさぎB いのししA いのししC うさぎD うまB

ねずみA いのししC

うさぎD うまB とらB ねずみA たつD さるB うまB

うさぎB

いのししC とりB ひつじA いのししC うさぎC ひつじA
とりC うさぎB
うしA ひつじB とらB うさぎB いのししA いのししD
ひつじD うしD
たつB さるD

なおこのことは誰にも言っではならない。変な行動を起こせばどうなるかわかっているな。

光彦 「なんですか、これは！？かあのぼんわけ……。日本語になつてないじゃないですか！

元太 「いのししAとかはまだ日本語になつてますけど……。」「コナン抜きでかよ……。前にもあつたな……。こんなこと。」

光彦 「コナン君が僕たちをかばって拳銃で撃たれちゃったんですよね……。」

元太 「俺が勝手に突っ走ったせいで……。それで俺がコナンを背負つて

みんなで逃げて暗号解いたんだよな……。」

（命懸けの復活 洞窟の探偵団のこと）

光彦 「あの時は元太君の背中、コナン君がヒントになることをつぶやいてくれたから

わかったんですよ……。でも今回は本当に“コナン君抜き”ですよ。」

歩美 「2人とも、頑張つて考えようよ。」

元太 「歩美……。」

光彦 「歩美ちゃん……。そうですね。僕たちは少年探偵団なんですよ。」

こんなことであきらめちゃだめです。」

元太 「そうだよな、光彦、歩美。」

そのとき……

「RRRRRRRRRR……」

元太 「なんだ？この音。」

光彦 「携帯ですかね……」

歩美 「コナン君の靴の下に携帯がある。」

光彦 「とりますよ……」

光彦が電話に出た。

「暗号の紙は見たか？」

光彦 「見ましたよ。それよりあなたは誰ですか？」

「……時間制限がないのも面白くない。今から1

時間、いや移動時間を考えて

1時間半以内にしよう……」

光彦 「1時間半以内に行ったらいいんですね？」

「そうだ。間に合わなかったらどうなるかわかるな？じゃ

あ切るぞ。」

「ツイッター」

電話は切れた……。

元太 「光彦……なんて言ってたんだ？」

光彦 「1時間半以内に来いと言ってました。つまり今が3時で

すから4時半までですね。」

元太 「1時間半以内に行けなかったら……」

歩美 「元太君、そんなこと言わないで……」

光彦 「そうですよ、元太君。」

歩美 「頑張って考えよう。」

光彦 「早く暗号を解かないと、解けても時間に間に合わないかもしれません。」

元太 「そうだな・・・。」

光彦 「頑張って3人で暗号を解きましょう。」

元太 「おう。」

歩美 「うん。」

第5章 意味不明な日本語（後書き）

とうとう暗号が登場いたしました。

コナンの計画が判明しました・・・。

3人への挑戦状だったのです。

まあ邪魔されて、自分が誘拐されてしまいました。

そして犯人からの謎の暗号・・・。

かあのぼんわけ・・・

日本語になってませんよね・・・。

あとのいのししAもポイントです。

2つ合わせて1つの暗号です。

かあのぼんわけ・・・をよく見て、あとのいのししAとかもよく見ると、何かがひらめくと思います。

この暗号にはある仕掛けがあります。

それも解いていただけたら嬉しいです。

暗号の答えがでる話は次の次の話になりそうです。

コナンの暗号の答えは次の次の話の予定です。

あと2話と言っていました。増えてこの話を含め、あと5話、全10話になります。

第6章 暗号解読への道 前編（前書き）

今回も日本語タイトルです。

題のとおり、犯人からの暗号を探偵団たちが解いていこうとします。

第6章 暗号解読への道 前編

光彦 「じゃあ、あそこのベンチに座って考えましょう。」

歩美 「うん。」

元太 「おう。」

3人はベンチに座り、暗号を考え始めた。

光彦 「では改めて見ますよ。」

君たちの友達は預かった。

返してほしければ次の暗号がしめす場所へ来い。

かあのぼんわけふしせはにおごばゆつつうでよいめろぬちばさやべら
えなてびもきがそざこすとたじよへむを

いのししA ひつじA ねずみC ひつじA とりB うさぎA
うさぎD うしA

ひつじC うさぎB いのししA いのししC うさぎD うまB
ねずみA いのししC

うさぎD うまB とらB ねずみA たつD さるB うまB
うさぎB

いのししC とりB ひつじA いのししC うさぎC ひつじA
とりC うさぎB

うしA ひつじB とらB うさぎB いのししA いのししD
ひつじD うしD

たつB さるD

なおこのことは誰にも言ってはならない。変な行動を起こせばどうなるかわかっているな。

元太 「だいたい、かあのぼんわけ……。って日本語になってねーじゃねーか。」

光彦 「暗号なんですから仕方ないですよ。僕も最初は元太君みたいに思いましたけど。」

歩美 「難しいね……。この暗号。」

光彦 「そうですね。」

元太 「かあのぼんわけ……。といのししAは別々に考えるのか？ 光彦。」

光彦 「別々に考えてあとで合わせるって感じだと思います。」

歩美 「この生き物の種類、どこかで見たことがあるような気がするの……。」

元太 「そういえば俺も……。」

光彦 「僕もです。でもそれが何か思い出せないんですよ……。」

歩美 「絶対どこかで見たことあるはずなんです……。」
光彦 「もっとよく暗号文を見てみましょう。」

歩美 「光彦君、紙とペン持ってる？」

光彦 「持ってますけど……。」

歩美 「私なりに考えてみたいの。」

元太 「俺も貸してくれ。」

光彦 「いいですよ。」

光彦は2人に紙とペンを渡した。

歩美 「うゝん．．．。」

元太 「うゝん．．．。」

光彦 「うゝん．．．。」

3人とも紙に思ったことや気づいた事を書き込んでいるようだ．．．

15分後．．．

光彦 「2人とも、何かわかりましたか？」

元太 「俺はアルファベットの種類を数えたぜ。A・B・C・Dの4つしかなかったぞ。

何回も見ただけど4つだけだった．．．。あと．．．。」

元太がまだ言おうとしていたがそれをさえぎって歩美が言った。

歩美 「私はでてくる生き物の種類を数えたの。全部で10種類だったわ。

でてくる順番で言うと、いのしし、ひつじ、ねずみ、とり、うさぎ、うし、うま、

とら、たつ、さるよ。」

光彦 「僕は、かあのぼんわけ．．．の文字数と、いのししAとかの生き物とアルファベットの

セットの数を数えました。かあのぼんわけ．．．が全部で48文字。生き物とアルファベットの

セットが全部で42です。」

元太 「少し答えに近づいたような気がするな。」

歩美 「そうだね。」

光彦 「では、みんなが調べた事をまとめてみましょう。」

- 1 アルファベットはA・B・C・Dの4種類。
- 2 生き物は、いのしし、ひつじ、ねずみ、とり、うさぎ、うし、うま、とら、たつ、さるの10種類。
- 3 かあのぼんわけ・・・は48文字。
- 4 生き物とアルファベットのセットは42。

光彦は持っていたメモにそう書いた。

光彦 「もう3時20分ですね。約束の時間まであと1時間10分です。」

元太 「もう20分もたったのか・・・。」

歩美 「えっ、もう20分もたったの？」

光彦 「この1〜4が暗号を解く手がかりになっているはずです。」

歩美 「うん。」

元太 「おう。」

コナンの監禁場所で・・・

？ 「薬の効き目はあとどれくらいなの？」

「40〜50分くらいだ。作って何回か試したんだ。そのおかげで完成に時間はかかったが、

寝不足にならずに済んだんだ。」

？ 「それはよかったわね。」

「手伝ってくれたらもつと早く出来たのに・・・。」

？ 「私だって暗号考えるの大変だったのよ・・・。何かヒントになるものはないかって

TVを見たり、本を読んだり・・・。」

「楽そうだな・・・。」

？

「じゃあ、難しい暗号を考えられるわけ？」

「それは・・・・・・・・・・。」

2人が話していると、隣の部屋で・・・

コナン 「ん？」

コナンは目が覚めた。

第6章 暗号解読への道 前編（後書き）

同じ暗号解読の話なので前編、後編としました。
ヒントもでていますが、不完全です。

後編の方にでているヒントの方がより明確です。
それでは後編の方もお読みください。

冒頭はコナンがでてきますよ。

第7章 暗号解読への道 後編（前書き）

暗号解読への道の後編です。

ヒントがでるので頑張って解読してください。

第7章 暗号解読への道 後編

コナン 「ん〜ん〜ん。」

コナンは漸く自分が口をガムテープで塞がれ、ロープで机に縛りつけられていることに気づいた。

（以下、暫くコナンの心の中の台詞です。本当は独り言になるんですが、

ガムテープで口を塞がれているので、心の中の台詞としておきます。）

コナン 「ここは・・・じゃねーか。え〜つと元太たちに『トイレに行く。』って言って、

“アレ”を実行するためにトイレの方まで行ったら、女の子に

『自転車のカギを落としちゃったから探して。』って言われて探してあげていたら、

薬か何かで眠らされたんだよな。あの時、オレの近くにはあの女の子しかいなかった。

ってことは、あの女の子がオレを眠らせたのか？ちよつと待てよ、あの女の子、

髪型は違ってたけど、・・・なんじゃねーか？顔は泣いてて手で隠れて見えなかったけど。

たぶん“泣いたフリ”だろうな・・・。それなら全てつじつまがあう。

じゃあオレを誘拐した理由ってのは、・・・
・・・ってことだろうな。

それなら、オレも“この作戦”に付き合ってやろう。」

コナンはこの誘拐事件の全てを理解したようだ。

3時40分・・・公園

光彦 「もう3時40分ですよ・・・。2人とも、何かあったことはありませんか？」

元太 「全然・・・。」

歩美 「私も・・・。（あと50分・・・。コナン君大丈夫かなあ・・・。）」

光彦 「そうですか・・・。僕も2人と一緒です。かあのぼんわけ・・・と

いのししAとかの關係がわからないんですよ・・・。」

歩美 「動物さんのことも氣になるし・・・。」

光彦 「どこかで見覚えあるんですけどね。」

元太 「だいたい“たつ”ってなんなんだ？」

光彦 「“たつ”は竜りゅうのことですよ。空想上の生き物です。ん・・・、たつ？あつ、ひよつとして・・・。」

光彦はあることをチェックし始めた。

光彦 「やつぱり。」

元太 「光彦、どうしたんだ？暗号解けたのか？」

光彦 「暗号はまだ解けてませんが、元太君のおかげでまた一歩前進しましたよ。」

歩美 「何がわかったの？光彦君。」

光彦 「あの動物たちは“干支”なんですよ。ねずみ、うし、とら、うさぎ、たつ、へび、うま、ひつじ、

さる、とり、いぬ、いのしし。へびといぬはありませんけど。まあそれは、暗号の都合

でしょう。ではさっきの書き直しましょう。」

1 アルファベットはA・B・C・Dの4種類。

2 動物はねずみ、うし、とら、うさぎ、たつ、へび、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、いのししの

12種類で干支になっている。(へびといぬは使われていない。

)

3 かあのぼんわけ・・・は48文字。

4 干支とアルファベットのセットは42。

光彦 「これでいいですね。また考えますよ。」

元太 「おう。あの動物は干支だったのか・・・。」

歩美 「元太君、ひょっとして本当は知らなかったんじゃないの？」

元太 「やつぱりバレたか・・・。」

光彦 「知ってるフリ」だったんですか・・・。歩美ちゃんは知っていましたよね？」

歩美 「うん。ね、うし、とら、う、たつ・・・ここまでしか言えないけど・・・でも見たらわかるよ。」

光彦 「干支の話はこれくらいにして暗号の答えを考えますよ。あと45分しかありません。」

歩美 「あと45分!？」

元太 「あとそれだけかよ・・・。」

3人は再び考え始めた・・・

光彦は考えた・・・

「いのししAなどが1つの文字を表しているはずだから・・・。その文字をかあのぼんわけ・・・から

選ぶんでしょうね・・・。ん・・・干支は12、アルファベットが

4つ。どれも干支とアルファベットの
組み合わせ……。あつ、1'2'3'4'5'6'7'8'9'
10'11'12。1'2'3……。・
11'12。」

次の瞬間……

光彦 「あつ！」

歩美 「どうしたの？光彦君。」

元太 「どうしたんだ？光彦。」

光彦 「暗号の答えがわかったかもしれないんです。」

歩美 「ほんと！？光彦君。」

元太 「ほんとかよ！？光彦。」

光彦 「ちよつと待っててください……。・」

光彦は紙にあるものを書いた。

光彦 「にふちふ……。あれ？」

元太 「どうしたんだ？」

歩美 「どうしたの？」

光彦 「日本語にならないんですよ……。あつ、逆か！」

光彦は紙にまたあるものを書いた。

歩美 「今度は？」

元太 「今度はどうなんだ？」

光彦

「2人とも、暗号の解き方がわかりましたよ。」

第7章 暗号解読への道 後編（後書き）

光彦が暗号を解読したようです。

ヒントが1〜4ありますが、重要なのは1〜3です。

次回いよいよ暗号の答えの発表です。

それまでお楽しみに。

第8章 Code breaking いざ、監禁場所へ（前書き）

いよいよ、暗号の答えの発表です。

解けた方はいらっしゃったのでしょうか・・・。

Code＝暗号

breaking＝解読

つまり暗号解読ということです。

第8章 Code breaking いざ、監禁場所へ

歩美 「ほんと！？光彦君。」

元太 「ほんとかよ！？光彦。」

光彦 「干支とアルファベットで1つのひらがなを表しているんですよ。干支は全部で12、

アルファベットは4、かあのぼんわけ・・・は48文字。このかあのぼんわけ・・・を

12文字ずつに分けると12文字のセットが4つできるんです。すると、

こんな表ができます。」

亥	戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子
か	あ	の	ぼ	ん	わ	け	ふ	し	せ	は	に
お	ご	ば	ゆ	つ	う	で	よ	い	め	ろ	ぬ
ち	ば	さ	ゃ	べ	ら	え	な	て	び	も	き
が	そ	ざ	こ	す	と	た	じ	ょ	へ	む	を
										D	C
											A
										B	

（多少文字がずれていて見にくいかもありません。それでも頑張ったんです。干支が漢字なのはひらがなにした時に字がずれて見にくかったからです。）

光彦はさっき書いた表を2人に見せた。

元太 「おおっつ。」

歩美 「すごい、光彦君。」

光彦 「干支とアルファベットの交わる所の文字をひろっていいんです。」

だからいのししAは『か』という感じで。えっつと、

か・ん・き・ん・ば・し・よ・は・べ・
い・か・ち・よ・う・に・ち・よ・う・め・
に・じ・ゆ・う・い・ち・ば・ん・ち・
て・ん・さ・い・は・つ・め・い・か・が・
す・む・よ・こ・。」「

元太・光彦・歩美 「監禁場所は米花町2丁目21番地天才発明家が住む横!？」

3人は驚いたようだった。

光彦 「天才発明家って博士の事でしょか? そうだとすると、博士の家の横ってことでしょうね。」

元太 「博士の家の横って空き地だったか?」

歩美 「空き地ってどういうこと?」

元太 「いくら誘拐した悪いヤツでも人が住んでる家を監禁場所にするか?」

歩美 「ちよつと待って……。確か博士の家の横って本がたくさんある幽霊屋敷じゃ

なかったっけ?」

元太 「なら犯人は、そこに誰も住んでいないって事を知ってたのか?」

光彦 「今はそんなこと言ってる場合ではありません。もう4時になります。博士の家はここから

20分ちよつとかかります。ちよつとい急がないと間に合わないかもしれません。」

歩美 「ええ〜っ。」

元太 「マジかよ!？」

光彦 「急いでいきましょう。」

歩美 「コナン君の靴持って行くね。」

元太 「じゃあ行くぞ!!」

3人は監禁場所である工藤邸へと向かっていった。
急ぎながらこんな会話をしていた・・・

元太 「でも、コナンを誘拐した犯人って相当かしこいんじゃないか?」

歩美 「だよな・・・でも何で誘拐されたんだろうね・・・」

元太 「なんか、見てはいけないモノを見てしまったとか?」

光彦 「信号が赤です。こんな時でもルールは守らないと・・・」

歩美 「これで私たちが事故に遭っちゃったらダメだもんね・・・」

元太 「でも、そんな犯人に俺たちだけで向かっていつていいのか?」

歩美 「コナン君が助からなくてもいいわけ?」

元太 「それは・・・」

歩美 「コナン君を助けられるのは私たちだけなのよ。ねえ、光彦君。そうでしょ?」

あつ、信号が青になったわ・・・急ぎましょう・・・」

光彦 「・・・」

歩美 「光彦君?」

光彦 「えっ!? なんですか?」

歩美 「コナン君を助けられるのは私たちだけだよ。ってことよ。」

光彦 「そうですね。」

元太 「そうだよな、俺たち少年探偵団だもんね。」

歩美 「光彦君、さっき何か考えてたの?」

光彦 「いえ・・・、コナン君が心配で・・・」

歩美 「私だって心配よ。でも、コナン君のこと信じてる……。
だってコナン君だもん……。」
元太 「俺だって心配だ……。でも4時30分までにつけばいいんだよね……。」

「そんな犯人に向かっていいのか？って元太君は言ってますけど、確かに…….と云うか、
そもそもなぜ犯人はこんなことをしたのでしょうか……。何かの理由でコナン君を誘拐したんなら、
なぜ僕たちにチャンスを与えるような事をしたんでしょう……。そんなことをしても、なんのメリットもないのに……。だいたい暗号まで作ってコナン君を探させるのって意味がないですよね……。」

身代金目的で、身代金要求の手紙を置いていくならまだしも……。もし、コナン君が1人で公園に

来ていたら、犯人はどうしたんでしょう……。この紙や、コナン君の靴が発見されるのは

かなり遅くなるはず……。あの手紙を見つけられる前に、捕まってしまう可能性だってある……。

それにあの暗号はかなり手がこんでいる……。ということは、計画的犯行？

最初からコナン君を狙っていたんでしょうか？でもそんな怪しい人がいたなら、コナン君が

気づくはず……。じゃあ、誘拐するのは決めていたけど、ターゲット標的は決めていなかった……。というのも

ありえなくはないですが、暗号を作ってまで誘拐するのにターゲット標的を決めていないっていうのも

変ですよ……。ひょっとしてこの誘拐の犯人っていうのは……。
」

光彦はこんなことを考えていたのだった・・・

歩美 「光彦君・・・？」

光彦 「あつ、どうかしましたか？」

元太 「さつきから黙ったままじゃねーか。俺だってコナンのこと心配だけどさ・・・。」

歩美 「やっぱり、コナン君が心配なんだよね・・・。」

光彦 「はい・・・。いくらコナン君だといっても心配です。（本当はこの誘拐の謎について

考えていたけど、とりあえず黙っておきましょう。）」

元太 「そういう歩美は元気だよな・・・。さつきは泣いてたくせに・・・。」

歩美 「だってもう暗号解けたし、それに・・・。」

元太 「それになんだよ？」

歩美 「なんでもない・・・。（本当はコナン君のこと、とって

も心配してる・・・。だけどコナン君に泣いてるところ見られたくないし・・・。）」

元太 「今何時だ？光彦。」

光彦 「4時15分です。あと5分くらいで着きますよ。」

そのころ・・・コナンはと言うと・・・

コナン 「いつまでこんなことに付き合わされるんだろうな・・・。それにしても、ロープで縛るのは

まだいいとして、ガムテープはやりすぎなんじゃねーか？確かにその方が雰囲気は

出るだろうけど・・・。“こんな誘拐”はあの時以来だ

な・・・人違いで誘拐された事も

あつたな・・・。（消えた誘拐逃走車の時のこと）まあ、
もう少しの我慢だな・・・。」

コナンが監禁されている部屋の横で・・・

？ 「もう4時15分ね・・・。約束の時間まであと15分。
大丈夫かしら・・・。」

「考える時間＋移動時間で1時間半は短かったか・・・？
ここまで20分くらいかかるから、

1時間は考えられる・・・。」

？ 「まあ、信じましょ。」

光彦 「見えてきましたよ！」

歩美 「あの中に入るんだよね・・・。」

元太 「今になって怖いのか？」

歩美 「そんなことないもん。（ほんととはちょっと怖いな・・・。

）」

光彦 「着きましたよ。」

元太 「いよいよだな・・・。」

歩美 「この中にコナン君がいるんだよね・・・。」

光彦 「じゃあ、入りますよ。」

3人はとうとう監禁場所へたどり着いたのだった。

第8章 C o d e b r e a k i n g いざ、監禁場所へ（後書き）

やっと暗号の答えがわかり、監禁場所へたどり着きましたね。暗号はどうでしたか？ほんとに見にくい表ですみません……。それで次話で会いましょう。

第9章 rescue（前書き）

rescue 救出

いよいよ探偵団たちが、暗号の答えの場所へ行きます。そして、光彦が犯人の名を・・・。

第9章 rescue

元太 「入るぞ！」

と言つて門を開け、走つていった。

歩美 「ちよつと待つてよ、元太君。」

元太 「なんだよ？歩美。怖いのか？」

歩美 「違うつて。いくらなんでも、そうやって音をたてて犯人に見つかつちやつたらどうするの？」

元太 「そ、そうか……。」

歩美 「そうだよ、光彦君？」

光彦 「確かに、歩美ちゃんの言つとおりで音をたてると犯人に見つかる恐れがあります。」

ですが……。」

歩美 「ほら、光彦君もそう言つてるでしょ。」

元太 「悪かったよ……。」

光彦 「ちよつと待つてください。まだ最後まで話してませんよ。確かに普通なら危険な

行為ですが、今回はたぶん大丈夫でしょう。でも、こんな所に入るの、あまり大きな音は

たてない方がいいと思いますけど。」

歩美 「勝手に入るから……だよ。でも『今回はたぶん大丈夫』ってどういうこと？」

光彦 「後でわかりますよ……。それより早く中へ入りましょう。」

3人は門を開け、玄関扉を開け、中へと入つていった。

歩美 「電気がついていないから少し暗いね。」

光彦 「電気はつけない方がいいでしょうね。」

元太 「どこにいるんだ？コナンは。」

歩美 「そうだね・・・、どこにいるんだろう・・・。」

光彦 「手前から順に見ていきましょう。」

3人は搜索を始めた。

元太 「じゃあ開けるぞ。」

「ガチャッ」

その中は・・・

元太 「トイレかよ。」

光彦 「人を隠せそうな場所はありませんね。あと8分くらいしかありません。」

歩美 「ええっつ。あとそれだけ？せっかく暗号解けたのに・・・。」

光彦 「じゃあ、この横はお風呂でしょうか・・・。」
「言い、ドアを開けた。」

「ガチャッ」

その中には・・・

光彦 「やはりお風呂ですね。一応探してみましよう。」

3人は人が隠せそうなところを探したが、コナンはいなかった。

光彦 「あと5分です。変なところにはいないはずですよ。暗号を解いて時間内に着いたのに

間に合わないなんて・・・。」

歩美 「だよね・・・。」

元太 「そうかどうか。暗号を解いたんだからな。」

光彦 「では次はここを探しますよ。」
と言ってドアを開けた。

歩美 「本がいつぱいある。」

元太 「この量はハンパじゃねーぞ。」

光彦 「コナン君はここにいるんでしょうか・・・。」

元太 「あそこから少し足が見えてるぞ。」
と言って机を指差した。

歩美 「コナンくん!!」
と言ってコナンの元へ駆け寄っていった。

光彦と元太も歩美の後に続いた。

そして歩美はコナンの口に貼られたガムテープをはがし、ロープをほどいた。

歩美 「コナン君、大丈夫？助けに来たよ。」
と言い、コナンの身体からだを揺さぶった。

そして・・・

コナン 「ん？ここは・・・。」

光彦 「コナン君、大丈夫ですか？」

コナン 「ああ。」

歩美 「よかった、コナン君が無事で。」

元太 「それより、コナンにしてはらしくねーんじゃねーか？」

光彦 「そうですよ。いったい何があっただんですか？（あの事は黙っておいて、とりあえず、

コナン君の話を聞きましょう。）」

コナン 「実はな・・・。オマエらに『トイレに行く。』って言うんだけど、あれは“嘘”なんだ。」

光彦 「もうわかってますよ。ねえ、元太君に歩美ちゃん。」

歩美 「うん。」

元太 「おう。」

コナン 「！？オマエらには言っていないぞ。オレはオマエらに・・・。」

と言ってポケットから“ある物”を取り出そうとした。だが・・・

・・・

コナン 「あれ？ないぞ。ポケットに入れておいたはずなのに・・・」

光彦 「コナン君、探し物はこの紙じゃないですか？」

と言っ “あの紙” を自分の服のポケットから取り出した。

コナン 「そ、それは！」

光彦 「その顔は凶星ですね。」

コナン 「ってか、なんでそれをオマエらが持つてんだよ。」

歩美 「公園の入り口の近くに落ちてたの。」

元太 「歩美が見つけたんだったよな・・・。」

光彦 「犯人はコナン君を連れ去る時に、コナン君のポケットから落ちたんでしょね。」

元太 「コナン、どうして俺たちに『トイレに行く。』って嘘ついてまであんなことしようとしたんだ？」

俺たちへの挑戦状ってことはわかってるけどさ。光彦が言っ てたからな。」

コナン 「この計画を実行しようと思ったのは光彦が、オレに抜け駆けとか1人でわかつたふりとか

どうにかならないのか？って聞いただろ。」

光彦 「確かに言いましたね・・・。あっひょっとして・・・僕たちが活躍できるように・・・」

ってことですか？」

コナン 「そうだ。オレはこの暗号の答えの場所に隠れようとしただけなんだ。

邪魔されちまつたけどな・・・。」

元太 「コナンを誘拐した犯人って誰なんだよ？まさかコナンじゃねーよな？」

歩美 「コナン君のわけないよ。」

光彦 「それでは、そろそろ登場してもらいましょうか。この誘

拐事件の犯人に。

いるんでしょう、どこかに。博士と灰原さん？」

元太・歩美 「え〜っ！！！」

2人は驚きのあまり大声で叫んだ。

そして・・・

コナン達のいる部屋の扉^{ドア}が開いた。

コナン達の前に哀と博士が姿を現した。

哀 「なんとか間に合ったようね。」

博士 「間に合わないんじゃないかと思っとったよ。」

歩美 「どうして哀ちゃんと博士だつてわかったの？光彦君。」

光彦 「元太君がコナン君を誘拐した犯人に向かっていつていいの？つて言つた時です。」

誘拐したのに暗号を残し、僕たちにコナン君を探させるような事をしたのか？

つて思つたんです。そんなことをしてもなんのメリットもありません。コナン君の誘拐は

カモフラージュで僕たちを誘^{おび}き出すのが目的だったとしても、暗号を残す必要はないと

思います。暗号の答えにあつた天才発明家ですが、博士

がそんなことをしているというのは

知る人は少ないはず……。この事を知っている人で、
なおかつ、こんなことをやりそうな人と

言えば2人しかいません……。証拠はありませんけど・
……。結果的に当たってましたし。」

歩美 「そっかゝすごいね、光彦君。」

元太 「そうだったのか……。」

哀 「見事な推理ね、円谷君……。でも何も言わないところ
をみると、暗号に隠された謎までは

わからなかったようね……。」

光彦 「暗号に隠された謎……。!？」

第9章 rescue（後書き）

予定ならば木曜か金曜に投稿出来たのですが、木曜の2時間目の体育の授業の後から熱っぽくて……。その日は熱が結構高くて授業聞いているだけで精一杯で休み時間に書けなく、家でもしんどくて書けず……。金曜日、多少無理して学校へ行きましたが、まだ少ししんどくて、あまり書けませんでした。家で少し書いて、昨日は半分おさまったので、（37.6度）頑張って書いてました。今日はほぼ平熱になったので9章の最後まで書き上げ、投稿する前に今までのを見直していたら、コナンの暗号の字がずれていて、それを直すのに苦労し……。こんな時間になってしまいました。さて、次話でいよいよ、暗号に隠された謎とコナンの暗号の発表です。あと2話で終了です。

第10章 コナンの暗号解読（前書き）

コナンが哀の作った暗号に挑みます。

第10章 コナンの暗号解読

元太 「暗号に隠された謎ってなんなんだ？」

歩美 「光彦君、わかる？」

光彦 「まだわからないです。」

元太 「博士、ヒントくれよ。」

博士 「いや……この暗号はワシじゃなくて、哀君が作ったんじゃない……。暗号の答えは教えて

もらったんじゃないが、“隠された謎”の方はまだ教えてもらってないんじゃない。」

光彦 「やっぱり灰原さんが作ったんですね。」

哀 「どうして私だってわかったの？円谷君。」

光彦 「この暗号とても難しかったです。博士には悪いですけど、博士にはこんな暗号

作れないでしょ……。」

哀 「確かにそうね……。」

博士 「哀君……。」

哀 「あとヒントのことだけど、この暗号作るのに時間がかかったから

そう簡単にはヒントは出せないわ。」

歩美 「仕方ないわ。元太君、光彦君、頑張って考えようよ。あの暗号だって解けたんだから

きっと出来るよ。」

光彦 「そうですね、歩美ちゃん。」

元太 「そうだな、頑張ろうぜ。」

コナン 「オレだけ仲間はずれにするなよ。オレも暗号解いて、その“隠された謎”まで

解いてみせるから暗号の紙くれよ、灰原。」

哀 「そう言うだろうと思ってちゃんと用意しておいたわよ。
(やっぱり工藤君ね……)」

コナン 「ありがとな、灰原。」

哀 「言っとくけど、結構難しく作ったつもりだから。」

コナン 「光彦たちに解けたんだからオレだって解けるさ。光彦、
この暗号解くのにとれくらい

かかったんだ？」

光彦 「そうですね……。1時間弱ですかね……。」

コナン 「結構時間がかかったんだな……。」

歩美 「難しかったもん、この暗号……。ねえ、元太君。」

元太 「難しかったよな。あんなに考えたの、俺生まれて初めて
だったかも。」

光彦 「これで元太君の頭の中に“集中”の2文字が入ったんじ
やないですか？」

元太 「光彦、俺だって集中する事あるんだぞ。」

哀 「うな重とか、何か食べてる時とかじゃないの？」

元太 「……。」

光彦 「凶星ですね、その顔は。」

コナン 「早く考えようぜ。」

コナンがそう言うと、光彦・元太・歩美の3人は机に集まり考え始
めた。コナンはというと……

3人から少し離れた所に座り込んで考え始めた。さすが自分の家の
ことだけはある……。

哀はそんな風景を面白そうに眺めていた。博士はそれをちよつとつ
まらなさそうな感じで見ていた。哀の暗号を解くコナン、哀の暗号
に隠された謎を解く光彦・元太・歩美の3人、自分の暗号を
解かれている哀。それぞれ楽しみがある。そういう“楽しむモノ”

がない博士は仕方ない・・・

コナンは考えていた・・・

「うーん・・・。この場合は表を作らないといけねーな。とりあえず、その“カギ”を見つけねーと。」

アルファベットはA・B・C・Dの4つか・・・。この動物の種類は・・・。。えーっと・・・。。ん？ たつ？

たつがあるってことはひよつとして・・・。ここに出てくる動物をピックアップしてみよう・・・。

いのしし・ひつじ・ねずみ・とり・うさぎ・うし・うま・とら・たつ・さる。全部”干支”に出てくる動物だ。」

次の瞬間・・・

コナン 「わかったぞ、灰原。」

元太 「なあ、みんな。」

ほぼ同時に2人の声が聞こえた。

哀 「えっ！？もうわかったの？（さすが工藤君・・・。私が何時間もかけて作った暗号を

あっさりと解いてしまうなんて・・・。）

歩美 「すごい！！コナン君。」

光彦 「やっぱりコナン君はすごいですね。」

哀 「で、答えは？」

コナン 「答えはまだだ。解き方がわかったただけだ。」

コナンたちが話していると・・・

元太 「俺の話を聞けよ。」

光彦 「すみません、元太君。コナン君が暗号解けたって言うものですから……。」

歩美 「それで元太君、何？」

元太 「こんなところにいつまでもいていいのか？俺たち勝手に入ってるんだぞ。」

歩美 「ほんとだ！忘れてた。」

光彦 「暗号を解くのに夢中になってすっかり忘れていましたね。博士の家にでも行きましょうか。」

「いいですよ？博士。」

博士 「そうじゃな……。」

光彦 「行きますよ、コナン君。」

コナン 「ああ。」

コナン・哀・博士は忘れていた。ココが新一「コナン」ほんもののいえの家であることは、もちろん3人とも

知っていたが、（コナンは自分の家なので当たり前）光彦・元太・

歩美の3人にとっては
ゆづれいやしき
工藤邸（ゆづれいやしき）と
思っている事を。

コナン・哀・博士・光彦・元太・歩美の6人は博士の家へと移動した。

元太 「喉かわいちゃったぜ。そういえば光彦、何か飲み物持ってきて来てるって言ってたな。」

光彦 「こういう事はよく覚えてるんですね。じゃあ、みんなで分けましょう。」

と言ってペットボトルに入ったオレンジジュースをかばんから取り出した。

博士はみんなの分のコップを持って来た。

そしてまた、コナンたち4人は考え始めた。少ししてコナンが・・・

コナン 「灰原、暗号の答えが出たぞ。」

哀 「答えは何になったの？」

コナン 「監禁場所は米花町2丁目21番地天才発明家が住む横。
つまり・・・

この隣の家ってことだ。」

つまりの後にすぐ言葉が続かなかったのは、思わず「オレの家」と
言いそうになり、どういう風に

言おうか少し迷ったからだ。いくら光彦たちがいる前でも自分の家
を工藤^{ゆうれいやしき}邸とは言いたくない。

哀 「正解よ。」

コナン 「じゃあ、後は“暗号に隠された謎”ってやつだな。」

光彦 「コナン君、わかったらヒント下さいね。」

コナン 「オレはいいけど灰原、いいのかヒントやっても？」

哀 「まあ、いいわよ。みんな頑張って考えてるし・・・。」

コナンは“暗号に隠された謎”を考え始めた。

第10章 コナンの暗号解読（後書き）

まず、一番最初に・・・。

11話目の投稿がずいぶん遅くなり申し訳ありません。前に投稿してから3週間が過ぎました。なかなか話がすすまないと思ったら話が止まらなくて・・・。本当は暗号に隠された謎というサブタイトルの予定だったのですが・・・。長くなったので結局2つに分けました。

第11章 暗号に隠された謎（前書き）

コナンと探偵団が暗号に隠された謎を解き明かす！

第11章 暗号に隠された謎

コナン 「暗号に隠された謎”か……。この暗号のどこに隠されてるんだろう……。」

哀 「江戸川君が頭を悩ませるって事は難しいってことね……。解けるかしら？江戸川君……。」

とちよつと挑戦的な口調でコナンに言った。

コナン 「解けるさ。いや、絶対に解いてやる。オレは解くまで帰らないぞ。」

元太 「じゃあ、ごはん食わないのか？」

光彦 「そういう言い方しか出来ないんですか？元太君は……。でも帰らないと蘭さんたちが

心配しますよ。」

コナン 「帰るまでに解くから大丈夫さ。」

哀 「すごい自信ね……。」

その後10分間誰もしゃべることはなかった……。ただ、博士はしゃべりたくてうずうずしていたが……。場の雰囲気くみを読み取り、しゃべることを我慢していた……。

最初にしゃべったのは光彦だった……

光彦 「難しいですね……。コナン君、何かわかりましたか？」

コナン 「いや、まだだ……。でも何かがひっかかっててわかりそうなんだ……。」

歩美 「コナン君なら解けるよ。だって私たちが解くのに1時間くらいかかった暗号をあんなに早く、

表のことに気づいて解いたんだから。」

コナンは歩美の言葉を聞いて・・・

コナン 「表・・・隠されている・・・何がひっかかる・・・
表・・・隠されている・・・」

あつ、ひよつとして・・・」

コナンは何かひらめいたようだった。

光彦 「何かひらめいたんですか？コナン君。」

コナン 「ああ。歩美ちゃんの言葉でな。」

と言うと、紙に何かを書いて哀と博士の所へ近寄っていった。

コナン 「こういうことだろ？灰原。」

とその紙を哀に見せた。その顔は自信で満ちていた。

哀 「正解よ。そんな顔してるのに合っていないわけがないわ。」

博士 「そうじゃの・・・。」

すると光彦が・・・

光彦 「コナン君、答えがわかったんならヒントくださいよ。」

コナン 「そうだなあゝ。“表”と“浮き上がる”だな。」

元太 「表？浮き上がる？表って暗号を解くのに使ったヤツか？
あんなの見たって

何も浮きあがらねーと思うぞ。」

歩美 「どうやったら浮きあがるのかを考えるんでしょ。」

哀 「そうよ・・・小嶋君。」

歩美 「光彦君、コナン君のヒントの意味わかった？」

光彦からの返事はない・・・

元太 「おい、光彦？」

歩美 「光彦君、さっきのコナン君のヒントで考えてるのよ。だまってるあげよう。」

「私たちも考えようよ。」

元太 「そうだな。」

光彦はコナンのヒントを元に考えていた・・・

「“表”に“浮き上がる”か・・・。じゃあ、表に何かが浮かび上がるってことでしょうか・・・。

でもこの表を見ても何も浮かび上がりません・・・。見るだけではないみたいですね・・・。

何か“カギ”になるものがあるはず・・・。でも“カギ”になるものといえば、他にはあの紙だけ・・・。

あれには脅迫文といのししAなどの暗号を解く手がかりが書いてあった・・・。」

光彦はなんとなく表の“いのしし”と“A”が交わる「か」のところに。をつけてみた。

次の瞬間・・・

光彦 「あゝっ!!」、

光彦は叫んだ。このカラクリがわかったようだ。

歩美 「わかったの？光彦君。」

元太 「たぶんこの考えで合ってると思います。2人とも手伝っ

てください。」

元太 「おう。」

歩美 「うん。」

3人は小声で作業を始めた。

光彦 「今からこの表の僕が言う場所のところを塗りつぶしてください。いきますよ……」

いのししA、ひつじA、ねずみC、とりB、うさぎA、
うさぎD、うしA、ひつじC、うさぎB、

いのししC、うさぎD、うまB、ねずみA、とらB、た
つD、さるB、うさぎC、とりC、ひつじB、

いのししD、ひつじD、うしD、たつB、さるD。これ
で終わりです。」

元太と歩美の2人は光彦の言ったとおりの所を塗りつぶした。

元太 「塗ったけど、これで浮き出るんだ？」

光彦はその塗りつぶされた紙を見た。

光彦 「ちゃんと浮き出てますよ。」

歩美 「あゝっ、“ハカセ”って浮き出てる。」
その紙を横から見ていた歩美が言った。

光彦 「元の向きで見るとアルファベットの“i”が浮き出てま
す。」

元太 「すげーな。俺たち。」

歩美 「元太君が解いたんじゃないでしょ。？光彦君の言ったと
おりにしただけじゃない。」

暗号はみんなで考えたけど・・・。」

光彦 「じゃあ、これを灰原さんに見せましょう。」

3人は哀と博士の名の浮き出た紙を哀たちに見せた。

光彦 「これでどうです？灰原さん。」

● あ の ぼ ● わ け ふ ● せ ●
お ご ● ● ● で ● ● ● ろ ●
● ぱ ● や ● ら え な ● び も ●
● そ ざ ● と た ● ● ● へ ● を

（哀はiで左端に、博士は顔を右に90°まげるとハカセが浮き出ています。）

哀 「正解よ。江戸川君のヒントがあつたとはいえ、やるじゃない。」

光彦 「これが解けていたら僕あの推理はいらなかったんですね・・・。」

哀 「でも円谷君の推理でも私たちにはたどりつかないことはないわよ。」

光彦 「じゃあ残るはコナン君の暗号ですね。」

哀 「じゃあ私も一緒に考えようかしら。？」

コナン 「灰原、わかったら3人にヒントやってもいいぞ。さっきオレもそうだったからな。」

4人はコナンの暗号を考え始めた。

第11章 暗号に隠された謎（後書き）

やっと暗号に隠された謎が明らかになりましたね。哀と博士の名前が浮き出ました。あの表作するのに30分ほどかかったんですよ。最初は該当する文字だけで表現しようと思いましたが、それでは皆さんが見にくいと思い、●で表現する事を思いつきました。それでも、他の字も打ち込むので、そのせいでずれて見にくいのを、微調整したり・・・本当に大変でした。哀がiになったのはスペース上あのようになってしまうました。コナンの暗号の答えも公開するつもりでしたが、長くなったので、次話に持ち越となりました。一応、次でコナンの暗号の答え&エピソードとなります。なので次話のサブタイトルはエピソードになると思います・・・。

それでは・・・。

第12章 Two motive (前書き)

Two = 2

motive = 動機

つまり2つの動機です。

第12章 Two motive

ふきすにおい

→ → ← → ← ←

→ ← → ←

← →

コナンの考えたこの暗号・・・

さつきから哀・元太・光彦・歩美の4人は暗号に悩まされいた・・・

そしてコナンは一つの疑問を抱いていた・・・

「なぜ灰原はオレに黙ってこんなことをやったんだ？電話でもしてくれれば協力してやったのに。」と

97

光彦 「コナン君の作ったこの暗号も難しいですね・・・見た感じでは灰原さんの作った暗号とは

種類が違うみたいですね・・・」

元太 「表を作って考えるんじゃないのか。」

歩美 「考え方が違うんだね・・・」

哀は元太が言った“表”という言葉で何かを思いついたようだった。そしてその思いついたことを確認した後言った。

哀 「わかったわよ、江戸川君。暗号の答えが。」

そう言った哀はコナンへ近づいて暗号の答えを見せて言った。

哀 「これで正解あつてゐるでしょ？」

コナン 「合ってるぜ、灰原。それにしても早かったな。」
とちよつと驚きの声で・・・

哀 「ええ。その理由わけは円谷君たちへのヒントと一緒に言うわ。

「

光彦 「ヒントをくれるんですね、灰原さん。」

哀 「ヒントは小嶋君が言った“表”よ。これで私は閃ひらめいたのよ、江戸川君。」

元太 「表を作つて考えないんじゃないのか？灰原。」
疑問に思つた元太は哀に聞いた。

哀 「確かに表を自分で作つて考える暗号タイプじゃないけれど、表は利用するわね。

絶対知っている表よ。あ、そうそう、矢印の向きと数も重要だからね。」

光彦・元太・歩美の3人は哀のヒントを聞いて再び考え始めた。

哀はコナンと博士の方へと戻つた。

哀 「ヒントの出し方はあれでよかったかしら？」
とコナンに聞いた。

コナン 「あれぐらいでいいんじゃないか。」

そしてその後、コナンは一つ疑問に思っていた事を小声で哀に聞いた。

コナン 「なあ、灰原。」

哀 「何？工藤君。」

コナンに合わせ、哀も小声で話す。

コナン 「なんでオレに黙つてこんなことやつたんだ？電話でもしてくれたら協力したぞ。

オレだつてこの事をやろうと思つて電話したんだぞ。ま

あ電話には出なかったけどな。

昨日の夜9時ぐらいと今日の朝9時ぐらいにな。あと、それと、この計画は灰原^{おまえ}が

博士に持ちかけたのか？」

と一つ疑問に思っていた事と、この計画について聞いた。

この問いに対して哀は・・・

哀 「工藤君がこの計画を実行しようと思った理由^{わけ}は？」

逆に哀がコナンに聞いた。

コナン 「たまにはアイツらに活躍させてやろうかなーって思っ
てさ。それがどうかしたのか？」

オレはなんで黙ってやったのか？って聞いているんだぞ。」

哀 「じゃあ、そう思った理由は（わけ）は？」

コナン 「光彦がオレに言った抜け駆けとか一人だけわかったふり
はどうにかならないのか？」

って言うのを聞いて……。まさか……。ひょっとして

灰原……。おまえ……。」

コナンは一つの確信を持った。

哀 「そうよ……。そのまさかよ。」

コナン 「本当の目的はオレと同じだよな……。」

哀 「ええ。本当の目的は工藤君と同じよ。工藤君に協力して
もらおうと思ったんだけど、

円谷君があんな事言っただし、こういうのもたまにはいい
んじゃないかと思っただけ。

工藤君ならこんな事してもちゃんとわかってくれると思
ったのよ。」

コナン 「ああ、目覚めて結構すぐにわかったぜ。監禁場所がオレ
の家だったってことと、

ここに連れてこられる前の事を思い出してな。あの声は

よく考えたら灰原だったんじゃおまえ

ねーのか？つてな。なんで黙ってたかはわからなかったが、やろうと思ってることは

わかったからその後は協力したけどな。それより博士、どうして灰原にこの話を

持ちかけられた時に断らなかったんだ？博士が灰原を説得してオレのところへ電話でも

すれば、こんな事にはならなかっただろ？」

と博士に不満をもらした・・・

博士 「哀君がどうしてもって言ったからのお。それに光彦君たちを活躍させてあげたい

っていうのもう1つの理由を聞いたらのお・・・」

コナン 「オレが抜け駆けしたり、一人でわかったふりしてるからたまにはオレをハメようみたいな事

言われたんだろ？」

博士 「そんな感じじゃ・・・あの時みたいでなあ。まああの時は遊びのつもりはなかったがのお。」

コナン 「おい、博士・・・」

哀 「あの時って前にもこんなことがあったわけ？」

コナン 「ほらきた・・・」

哀 「何があったわけ？」

コナン 「しゃーねーな・・・」

コナンは仕方なくあの時の事「江戸川コナン誘拐事件（原作）の時のことを手短に話した。

哀 「工藤君でも自分のお父さんには勝てないのね・・・」

コナン 「まあ・・・。（つたく博士が余計なことを言うから・・・。）」

とコナンたちが小声で話していると・・・

光彦 「灰原さん、もうちょっとヒントをもらえませんか？」

と光彦が言った。3人はこの暗号に苦戦しているようだ。

コナン 「じゃあ、今度はオレが……。」

コナンは紙に何かを書くと言ったと光彦たちに見せた。

えら

←

←

←

コナン 「これが“おれ”になる。灰原が言っていたように矢印の向きと和は重要だ。

あと表つてのは、学校で習ったぞ。」

光彦 「えっ、学校で習ったんですか？」

と光彦は驚いた。

歩美 「学校で習った表つていえば……“あいうえお”の表ぐらいしか思いつかないけど……。」

これを使うのかなあ……。」

次の瞬間……

光彦 「わかりましたよ、暗号の答えが……！」

第12章 Two motive (後書き)

高校の定期テストもあったので更新がかなり遅れました。今日やっと終わったので、書き溜めていた分を打ち込みました。書いていると止まらなくなり、次回で終了です。

エピソード } Last Mystery (前書き)

Last 〓 最後

Mystery 〓 謎

最後の謎です。

いよいよ探偵団が哀の暗号に隠された謎を解き明かす！

エピソード Last Mystery

元太 「本当かよ!? 光彦。」

歩美 「すごい、光彦君。」

光彦は2人に説明を始めた。

光彦 「あの矢印の向きは上下どちらにずらすか、数はどれだけのずらすかを表していたんです。」

歩美 「わかったあ。それで“あいうえお”の表を使うんだね。」

元太 「じゃあ、さっきの“えら”は『え』は←が1つだから下に1つずれて『お』、『ら』は←が

3つだから下に3つずらして『れ』、つまり『オレ』になるってことだな。それと同じように

解けばいいんだな。」

歩美 「それじゃあ、最初のは、『ふ』に←が2つだから、『は』になるね。」

光彦 「次は『き』に←が1つで『か』ですね。」

元太 「『す』に←が1つで『せ』。」

歩美 「『に』に←が3つで『の』。」

光彦 「『お』に←が3つで『い』。」

元太 「最後は『い』に←が2つで『え』。」

光彦 「つまり、今の6つを合わせて、『は・か・せ・の・い・え』。」

光彦・元太・歩美 「博士の家!!」

3人は一斉に叫んだ。

歩美 「コナン君、今ので正解あっているよね?」

コナン 「おう、合ってるぜ。」

光彦 「やりましたね、元太君に歩美ちゃん。」

歩美 「うん。」

元太 「おう。」

光彦 「灰原さん、1つ聞いてもいいですか？」

と光彦が哀に聞いた。

哀 「別に構わないけど、何？」

光彦 「コナン君が1人で暗号あんなものを作ってたことは、コナン君は灰原さんたちの計画を

知らなかったってことですか？そうになるとコナン君に黙ってこの計画を実行したってことに

なりますけど・・・。」

哀 「ええ、江戸川君には黙ってやったわ。」

光彦 「どうしてです？灰原さん。」

と疑問を持った光彦は哀に聞いた。

哀 「円谷君が江戸川君に言ってたでしょ。抜け駆けしたり、一人でわかったふりするのとは

どうにかならないのか？ってね。」

光彦 「じゃあ、僕たちが公園に行こう。って話をしてて、灰原さんも誘った時に『博士の家の

掃除するから。』って言って断りましたけど、その時にはもうこの計画が頭にあって

断ったんですか？」

哀 「まあね。だいたいのは考えていたわ。3人には悪いかなあとは思ったんだけどね。

でも3人にも活躍させてあげるんだからいいかなあって思ったのよ。どうだったかしら？

この計画。」

元太 「ああ、よかったぜ。俺らだけで灰原の暗号解いたしな。俺らがやったわけじゃないけど、

コナンをハメられたしな。なあ、光彦。」

光彦 「はい、とってもよかったです。僕たちだけで暗号解けて

よかったですね。歩美ちゃん。」

歩美 「うん……。 （でもコナン君がちょっとかわいそうだったな……。 ）」

哀は歩美の返事を聞いてこんなことを思っていた。「吉田さんにはちよと可哀想だったな……。」と

光彦 「コナン君はこの計画にいつ気づいたんですか？」

元太 「どういことだ？光彦。」

元太はその意味がよくわからず光彦に聞いた。

光彦 「僕が灰原さんと博士が犯人だって言つた時、驚いていませんでしたし、僕たちが

コナン君を助けた時だつて『ここはどこだ？』とかつてことを言わなかつたので、途中で

気づいて後は灰原さんに協力したんじゃないかと思つて・

……。」

コナン 「ああ、オマエらが来る前に目が覚めて少し考えたらわかつたぜ。……連れて行かれる前、

近くには“オレくらいの年の女の子”しかいなかった。

それとあの声は考えて見たら

灰原なんじゃないか？つてな。そんな事する”オレの年
くらいの女の子”つていつたら、

灰原ぐらいしかいねーからな。」

少しつまつたのは「目覚めたら工藤^{おれのいえ}邸だったから。」と言いそうになつたからだ。

哀はコナンの“連れて行かれた”という表現を聞いてこんな事を思つていた。

「やつぱり、自分の口から『誘拐された』つて言つのは嫌みたいね。だから“連れて行かれた”つて表現になつたのね……。 」と

元太 「それにしてもコナン、今回は灰原にやられたな。」

コナン 「うるせーな。」

歩美 「哀ちゃん、どうやってコナン君をあの工藤邸ゆづれいやしきに連れて行ったの？」

哀 「博士に薬を作ってもらったのよ。ねえ、博士。」

博士 「ああ、これで寝たい時に寝られるから一石二鳥じゃわい。」

光彦 「じゃあ、そろそろ帰りましょう。もう5時半ですし。全ての謎も解けましたし。」

哀 「気をつけて帰るのよ。」

博士 「そうじゃぞ。車に気をつけてのお。」

そしてコナンたちは博士の家を出た。

光彦 「今日は疲れましたけど、楽しかったですね。」

元太 「そうだな。俺たちだけでこんなに頑張ったのは初めてだよな。あの時はコナンのヒントが

あったからなあ。（命がけの復活シリーズのとき）それに・・・。」

コナン 「もうその話はいいだろ？」

と元太がしゃべるのを止めた。それに・・・の後に『コナンをハメラれたしな・・・』と言われると

思ったからだ。

歩美 「今日はこんな事があったから公園であまり遊べなかったでしょ？だからまた遊びに行こうよ。」

光彦 「じゃあ、月曜日の学校が終わった後、遊びに行きましょうか。」

コナン 「じゃあ、オレン家ちに集まってから行くか？それとも公園に直接集合するか？」

元太 「コナンの家に集合でいいんじゃないか？コナンの家まで10分ありゃ行けるし、」

コナンの家から公園までの道ってわかりやすいしな。」

光彦 「もつともらしい理由ですけど、本心はコナン君の家で何か飲みたいんじゃないですか？」

元太 「……。」

コナン 「その顔は図星だな。」

歩美 「でも道はわかりやすいんだから、コナン君の家に集合でいいんじゃない？（また早く行こうと。）」

光彦 「そうですね。」

そして四つ角で……

コナン 「じゃあ、オレはこっちだから。じゃあ、また月曜日にな。」

光彦 「月曜日に学校で。」

元太 「またなあ。」

歩美 「じゃあねえ、コナン君。」

こうしてこの事件は幕を閉じたのだった。

エピソード Last Mystery (後書き)

12月7日に初めて投稿して、14話投稿するのに3ヶ月もかかってしまいました。が、どうでしたか？初めての作品だったのでおかしなところもあったと思いますが。次回作は今考えていますので、次回作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2511b/>

コナンのピンチ??に探偵団！

2010年10月9日13時34分発行